

# 唯識思想の成立と展開

——唯識を学ぶ人のために——

舟 橋 尚 哉

## はじめに

最近、唯識思想を学ばんとする学生は多い。しかしながら、「唯識」は「唯識三年、俱舍八年」<sup>①</sup>といわれるように、難解であるため、卒業論文のテーマにはなっても、中々優れた論文には出会えない。その理由は、原典が難解なために、直接原典を用いずに、唯識に関する概要書、それも唯識入門書を中心に論文を作成する場合が多いからだと思う。もともと、このことは私の学生に対しての指導力が充分でないことによるのかもしれない。

そこで今年からは、原典を翻訳でもよいから読んでもらい、疑問なところはその場で質問してもらうか、それとも後から私の所へ聞きに来てもらうようにすることを考えている。

そのような唯識思想の卒論を書くこととする人々に、何らかの役に立てばと思い、この小論を書くことにした。とはいっても、今年の私のゼミの四回生は二十数名いるため、十分な指導ができるかどうか、不安もあるが、何とか責任を果たしたいと考えている。

## 一、 瑜伽唯識の思想的位罫

インド大乘仏教には、二つの大きな流れがある。一つは中観思想であり、もう一つは唯識思想である。

義浄三蔵 (AD 635-713) の『南海寄帰内法伝』には、

「所云大乘 無過二種」

一則中観 二乃瑜伽」(大正五四、二〇五C)

とあるように、義浄がインドに行ったとき、ナーランダ寺に留まって研究したが、この二潮流が、インド大乘仏教の代表的思想であったことを伝えている。その中、中観思想はいうまでもなく、般若の空思想を中心に、八宗の祖師である竜樹(Nagarjuna)が開顕した思想の流れを汲むものであり、

「不生不滅 不常不斷

不一不異 不來不去」<sup>②</sup>

の、いわゆる八不によって説示されるように、あくまでも、あらゆる自性を否定する無自性・空の立場に立っている。それに対して唯識思想は、竜樹によって開顕された空思想が、空亦復空として徹底的にすべてが否定された結果、依り所すら、何もなく、そのため不安に堕ち入ったりすることのないように、あらゆるものについて、虚妄分別され、遍計所執されたものについての無を説くものであり、ここに中観思想と唯識思想との違いが見られる。そういう点から、中観思想が「なしの否定」<sup>⑤</sup>といわれるのに対して、唯識思想は「にあらずの否定」<sup>⑤</sup>であるといわれている。

このように唯識は、すべてを否定するというよりは、現実の世界は幻の如き世界であり、心の顯われにすぎないが、転識得智した悟りの世界を肯定しようとしているように思われる。その点から、唯識思想は「無の有」の思想であるともいわれる。

転識得智の内容については、『大乘莊嚴經論』第九章菩提品には、

「『大円鏡智は不動である。

平等性と妙觀察とにおけると、

及び成所作におけるとの、

三つの智慧がそれに依止している』(第67偈)

諸仏の智慧は四種である。大円鏡智と平等性智と妙觀察智と、及び成所作智とである。大円鏡智は不動で、これに依止する三智は動である」<sup>⑥</sup>

と説かれている。漢訳によれば、

「『四智鏡不動 三智之所依

八七六五識 次第転得故』

釈曰、四智鏡不動、三智之所依者。一切諸仏有四種智。一者鏡智。二者平等智。三者觀智。四者作事智。彼鏡智以不動為相。恒為餘三智之所依止。何以故。三智動故。八七六五識、次第転得故者。転第八識得鏡智。転第七識得平等智。転第六識得觀智。転前五識得作事智。是義応知」(大正三一、六〇六c)となっている。

このように、般若の空・竜樹の空思想は、あくまでも「空」を究極のものとして説く「無の教え」であるのに対して、瑜伽唯識思想は、すべてを空じたあとに転識得智として、智を認める「無の有」の教えであるともいわれる。

瑜伽唯識派の所依の經典といわれる『解深密經』の無自性相品には、これら「有の教え」「無(空)の教え」「無の有の教え」を「三時の教判」によって、次の如く説かれている。

「世尊、初め(第一) 一時に於て、婆羅痾斯仙人墮処施鹿林の中に在して、惟、声聞乘に発趣する者の為に、四諦の相を以て正法輪を転じたもう。是れ甚だ奇にして甚だ希有なりと為す。一切の世間、諸の天人等にして先に

能く法の如く転ずる者有ること無しと雖も、而も彼の時に於て転じたまえる所の法輪は、有上なり、有容なり、是れ未了義なり、是れ諸の淨論の安足する処所なりき。

世尊、在昔、第二時の中に於て、惟発趣して大乘を修する為に、一切の法に皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本来寂靜にして自性涅槃なるに依つて、隱密の相を以て正法輪を転じたまう。更に甚だ奇有なりと為すと雖も、而も彼の時に於て転じたまえる所の法輪も、亦是れ有上なり、有容なり、猶未了義なり、是れ淨論の安足する処所なりき。

世尊、今第三時の中に於て、普ねく一切乘に発趣する者の為に、一切法は皆自性無く、生も無ければ滅も無く、本来寂靜にして自性涅槃なる無自性に依つて、顯了の相を以て正法輪を転じたまう。第一の甚希にして最も希有なりと為す。干今世尊の転じたまう所の法輪は、無上なり、無容なり、是れ眞の了義にして諸の淨論の安足する処所に非ざるなり」<sup>⑦</sup>

これによつて、瑜伽行派といわれる唯識思想の立場が、少しは理解して頂けるかと思う。

## 二、初期唯識論書について

従来、弥勒の五部論が比較的古いものであり、初期唯識思想をよく伝えているのではないかとわれてきた。ところが最近、弥勒の五部論の中に、後期のものが含まれているのではないかといわれるようになり、弥勒の五部論を再考する必要が生じてきた。

そこで私も最近、弥勒の五部論について論じたが、ここに唯識を学ばんとする初心者のために、簡単に述べることにする。

一般に弥勒の五部論といわれるものは、中国伝では、

1、瑜伽師地論

2、分別瑜伽論（引用のみで現存せず）

3、大乘莊嚴經論頌

4、弁中辺論頌（中辺分別論頌）

5、金剛般若論頌

などの五論であり、チベット伝では、

1、Mahāyānasūtrālaṅkāra 大乘莊嚴經論頌

2、Madhyāntavibhāga 中辺分別論頌

3、Dharmadharmatāvibhāga 法法性分別論

4、Abhisamayālaṅkāra 現觀莊嚴論頌

5、Uttaratantra 究竟一乘寶性論頌

などの五論があげられている。この中で、チベット伝と中国伝とに共通にあげられている論書は、

1、大乘莊嚴經論頌 (Mahāyānasūtrālaṅkāra)

2、中辺分別論頌 (Madhyāntavibhāga)

の二論のみである。この二論はいずれも梵・藏・漢の三本が揃っており、研究する書物としては、申分のない重要な論書である。

もっとも、弥勒の五部論といっても、大体、弥勒 (Maitreya) が實在の人物であるか、否かについても、まだ確定していない。

①宇井伯寿博士は、弥勒は歴史上の人物であると主張された。<sup>⑩</sup>

これに對して、弥勒は本当は弥勒菩薩である。すなわち、弥勒というのは信仰上の菩薩であつて、

② 実際は弥勒菩薩から啓示を受けて、無着が書いたという説と、

③ 無着以前の諸論師の作を、すべて弥勒菩薩が造つたということにして、伝承されたという説がある。従つて、大きく分けて弥勒著に関しては三説あることになる。

「弥勒の五部論」の中で、後期のものではないかと疑われている代表的なものは、『法法性分別論』である。

私もかつて、『法法性分別論』では世親の註釈の部分ばかりでなく、弥勒に帰せられる本文の中にも、vijñapti-mātra (唯識) に相当するチベット訳 rnam par 'rig pa tsam という語が三回も見出される」が、『大乘莊嚴經論』の頌(弥勒頌または無着頌) には、vijñapti-mātra は全く見出されない。勿論、『大乘莊嚴經論』の長行の部分(世親註) には vijñapti-mātra が説かれている。このようなことから、『法法性分別論』の偈頌の部分が弥勒のものとする<sup>⑪</sup> ことには疑問があると論じたことがある。

袴谷憲昭氏も別の理由で『法法性分別論』を弥勒著と見ることはできないといわれ、

「マイトレーヤ (Mañjeya 弥勒) に帰せられる『法法性分別論』の方は、その著者に関する伝承から推測されるほどに古いものではなく、後に展開した術語を自明のごとく前提とした上で述作されており」<sup>⑫</sup>

と論じている。勝呂信静博士も『初期唯識思想の研究』の中で、

「『法法性分別論』は『瑜伽論』『撰大乘論』より後の作成であろうと思う」<sup>⑬</sup>

といわれる。

ところが最近、『法法性分別論』はもつと後世のもので、安慧 (Sthiramati) 以後の成立であると、仏教大学教授松田和信氏は論じている。

「4、『法法性分別論』は初期唯識文献ではない。最近では、袴谷憲昭、勝呂信静、舟橋尚哉等の諸氏の研究を

通して、Dh. DhV (法性分別論) の所説が、すでに完成した唯識思想を前提としての指摘が次々となされている。本稿での筆者の取り上げた点からも、NPD (入無分別法門経) が Dh. DhV (法性分別論) に先行する文献であることは確実であるように思われる。しかし NPD (入無分別法門経) は、ステイラマティ以前の文献には溯り得ない<sup>⑭</sup>」

このように「弥勒の五部論」といわれるものの中に、後のものが混っているとすれば、初期唯識論書を考察する場合、当然、「弥勒の五部論」の中で、どれとどれが後世のものをかを確定し、それらを初期唯識論書から除かなくてはならないだろう。こうすることによって、初期唯識論書が確定し、そこから初期唯識思想も明らかになると思う。

### 三、唯識思想の所依の経典

——『解深密経』——

唯識思想の所依の経典といえば、『解深密経』や『大乘阿毘達磨経』があげられるが、その中、『大乘阿毘達磨経』は『撰大乘論』などに引用されているもの<sup>⑮</sup>、一つのまとった経典としては現存していない。

そこで唯識思想の所依の経典としては、『解深密経』が重要視されている。ところが『解深密経』は『瑜伽師地論』(以下『瑜伽論』という)の巻75、76、77、78と全くといってよいほど一致している。

『瑜伽論』巻75 (大正30、七二二c) —— 『解深密経』勝義諦相品第二 (大正16、六八八c)

『瑜伽論』巻76 (大正30、七二八a) —— 『解深密経』心意識相品第三 (大正16、六九二a)

『瑜伽論』巻76 (大正30、七二八c) —— 『解深密経』卷第二、一切法相品第四 (大正16、六九三a)

『瑜伽論』巻76 (大正30、七一九b) —— 『解深密経』無自性相品第五 (大正16、六九三c)

『瑜伽論』 卷77 (大正30、七三三b) — 『解深密經』 分別瑜伽品第六 (大正16、六九七c)

『瑜伽論』 卷78 (大正30、七二九a) — 『解深密經』 地波羅蜜多品第七 (大正16、七〇三b)

『瑜伽論』 卷78 (大正30、七三三c) — 『解深密經』 卷第五、如來成所作事品第八 (大正16、七〇八b)

『瑜伽論』 卷78 (終り) (大正30、七三六c) — 『解深密經』 卷第五、(終り) (大正16、七一b)

ただ『瑜伽論』では『解深密經』を引用する形式をとっているので、『瑜伽論』の卷75の途中から「如『解深密經』とあつて、勝義諦相品をまるごと引用し、『瑜伽論』の卷76ではやはり「如『解深密經中』」(大正30、七一八a)とあつて、『解深密經』の心意識相品と一切法相品と無自性相とに全く一致している。

また『瑜伽論』の卷77でも、やはり「如『解深密經中』」の分別瑜伽品と全く一致している。更に『瑜伽論』卷78でも、やはり「如『解深密經中』」(大正30、七二九a)とあつて、『解深密經』の地波羅蜜多品と一致し、また「分別如來成所作事」とあり、「如『解深密經中』」(大正30、七三三c)とあつて、『解深密經』の如來成所作事品と全く一致している。

ただし『解深密經』の序品だけは、『瑜伽論』に全く見出されないから、おそらく『解深密經』として流布するときに、經典としての形を整えるために、附加されたものであろう。

ここで問題となるのは、『瑜伽論』は本当に『解深密經』を引用したのか、すなわち、『解深密經』の方が先に成立していたのか、それとも『瑜伽論』を編纂する段階で『解深密經』は成立したのか、それとも『瑜伽論』から別出して『解深密經』が成立したのか、という問題である。

これらのことは、『瑜伽論』がどのようにして成立したのか。すなわち、複数の人々が集まって編纂されたのか、無着(Asaṅga)を中心にして造られたのか、などと関連しているので、今後の課題であると思う。

ところで『解深密經』は玄奘訳であるから、『瑜伽論』(玄奘訳)と訳語もすべて一致しているが、『解深密經』には



菩提流支訳の『深密解脫經』もあり、当然、訳語は異なっているが、内容はほぼ同じであるから、同じ原典からの訳出と考えられる。

しかしながら、残念なことにサンスクリット原典は未だ見つかっていないので、チベット訳から、サンスクリット原典を推測する以外にはどうしようもない。

更に部分訳ではあるが、真諦訳の『解節經』や、求那跋陀羅訳の『相統解脫地波羅蜜了義經』もある。

ただ『解深密經』は唯識思想の所依の經典といわれるので、一番古いものかといえば、そうではない。『解深密經』よりも、『瑜伽論』の声聞地や菩薩地の方が古いといわれるので、この点について考察してみよう。

#### 四、『瑜伽師地論』について

『瑜伽師地論』（以下『瑜伽論』という）は玄奘三蔵訳で全百卷あり、本地分五十卷（卷一―卷五十）、摂決摂分（卷五十一―卷八十）、摂釈分（卷八十一―卷八十二）、摂異門分（卷八十三―卷八十四）、摂事分（卷八十五―卷百）となっている。

この中、現在サンスクリット本が見つかった個所は以前から見つかっていて、出版されていた菩薩地<sup>16</sup>（*Bodhisattvabhūmi*）（卷三十五―卷五十）があり、宇井伯寿博士の「梵漢対照菩薩地索引」<sup>17</sup>が昭和36年に作られている。チベット訳と漢訳は揃っていたが、サンスクリットはラフフラ、サンクリートヤーヤナがシャル寺で見つけた写本の写真版を持って帰ってきたといわれながら、中々出版されなかった。

ところが一九五七年に *Bhattacharya* によつて待望の *Yogacarabūmi Part I* (1957) が出版され、『瑜伽論』の梵本が菩薩地以外にもあることを実感した。これは漢訳の

#### 1、五識身相應地

2、意地

3、有尋有伺地

4、無尋唯伺地

5、無尋無伺地

に相当する。

その後、Dutt: Bodhisattvabhūmi (1966) が出版された。これは先に出版された Wogihara 本と大体同じであるが、対照して読むことによって、より正確に読めるようになった。

更に Shukla: Śravakabhūmi (1973) が出版されることにより、声聞地（漢訳卷二十一—卷三十四）は菩薩地とともに、古い個所といわれていただけに、注目をあびた。

梵本は漢訳の卷一—卷五十に相当する個所の大部分が見つかっていると聞いているが、漢訳の卷十一—卷二十に相当する個所は、まだ出版されていないと思う。学界のためにも、一日も早い出版が切望されている。

ところで卷五十一—卷百の梵本は最近まで見つかっていなかった。ところが松田和信教授によって、最近、発見され、発表されている。

すなわち『瑜伽論』『撰決択分』卷五十三、卷五十四の梵本が見つかり、更に「撰異門分」の一葉も発見され、ついに『解深密経』に対応する『撰決択分』の「分別瑜伽品」の末尾から地波羅蜜多品の前半部に相当する部分の梵本も発見され、公表された。<sup>18)</sup>

さて『瑜伽論』の漢訳者、玄奘三蔵 (AD-602-664頃) は、何故当時瑣国状態にあった中国から国の法律を犯してまで、インドのナーランダへ行ったのであろうか。それは一つには『瑜伽論』の前半の部分である『十七地論』（真谛 AD499-569 訳『十七地論』は散逸、玄奘訳では本地分）と『決定藏論』（玄奘訳では『撰決択分』を求めて、十

七地論の原典を手に入れて勉強すべくナールランダの戒賢のもとへ行ったが、その時、戒賢は百六才位であったといわれる。

「十七地」というのは、『瑜伽論』卷一―卷五十に相当し、

- (1) 五識身相応地
- (2) 意地
- (3) 有尋有伺地
- (4) 無尋唯伺地
- (5) 無尋無伺地
- (6) 三摩呬多地
- (7) 非三摩呬多地
- (8) 有心地
- (9) 無心地
- (10) 聞所成地
- (11) 思所成地
- (12) 修所成地
- (13) 声聞地
- (14) 独覺地
- (15) 菩薩地
- (16) 有余依地

(17) 無余依地

の十七地である。

当時、インドの僧や西域の僧が次々と中国へ原典をもたらしたので、その中の一人のインドの僧 Prabhakaramitra (波羅頗迦羅蜜多羅) の影響があったのではないかといわれる。<sup>⑮</sup>

「ブラバーカーラミトラ (波羅頗迦羅蜜多羅 Prabhakaramitra) は、クシャトリヤ出で、十才で出家、受戒ののち律を学び、それから十二年たったとき、マガダのナーランダに遊学し、ここで戒賢がヨーガーチャラ、ブーミをさかに唱導しているのに出会い、これを聴習してから大乘ばかりでなく、小乗にも精通するようになった」<sup>⑯</sup>

玄奘三蔵が長安を出発したのが、貞観三年 (六二九年) 二十八才のときか、または貞観元年 (六二七年) 二十六才のときかであるといわれる。

一方、ブラバーカーラ・ミトラが長安に着いたのは、

「貞観元年歲次丁亥十一月二十日を以って京に達し」<sup>⑰</sup>

とあり、宇井博士の『大乘莊嚴經論研究』では、

「(ブラバーカーラミトラは) 六二六年六十二才高平王とともに長安に至る或は翌年か」<sup>⑱</sup>

とあり、

「玄奘は貞観元年、あるいは翌々年、玄奘インドへ出發す」<sup>⑲</sup>

とあり、このインド出身のブラバーカーラ・ミトラが長安に来た直後に、玄奘はインドへ向って出發したと思われる。

従って、玄奘三蔵は、ブラバーカーラ・ミトラがナーランダにいたときの様子を直接または間接に聞き、唯識を説く戒賢が百才以上の高令であることを知り、いても立ってもおれなくなり、国の法律を犯してまで、ナーランダへ行ったのではないかと推測されている。

この『瑜伽論』は菩薩地に相当するところは曇無讖訳『菩薩地持經』や求那跋摩訳『菩薩善戒經』と相い対応しているし、『瑜伽論』巻75—巻78はいうまでもなく『解深密經』と一致している。

ここには『瑜伽論』という論書と、『解深密經』や『菩薩地持經』のように、經典といわれるものが全く同じであるか、あるいは類似している（訳語が異なる）という、大変興味のあることが見出される。これは大乘經典の成立過程を考察する上で、何らかの示唆を与えているのかもしれない。

## 五、唯識 (vijñapti-matra) の成立と展開

『解深密經』の分別瑜伽品には、「唯識」(vijñapti-matra) という語が見出される。

「世尊よ、毘鉢舍那 (vipaśyana) を行う三摩地 (samādhi) の行境は影像 (bimba, pratibimba) ですが、それ何ですか。かの心と異であるか、異でないかといえは、慈氏よ、異ではないといわれる。何故に異ではないかといえは、かの影像は唯識 (vijñapti-matra) であるからである。慈氏よ、識の所縁は唯識 (vijñapti-matra) によって顕されると私は説くのである」<sup>24</sup>

ここには明らかに vijñapti-matra (唯識) という語が用いられている。ここでは

- (一) 有分別影像
- (二) 無分別影像
- (三) 事の辺際
- (四) 所作の成弁

の四つの所縁が説かれているが、これに先行する『瑜伽論』の「声聞地」では、この四種所縁は説かれているが、唯識 (vijñapti-matra) は説かれていない。<sup>24</sup>

すなわち、『瑜伽論』の「声聞地」巻二十六では、

「云何所縁。謂有四種所縁境界事。何等為四。一者遍滿所縁境界事。二者淨行所縁境界事。三者善巧所縁境界事。四者淨惑所縁境界事。云何遍滿所縁境界事。謂復四種。一有分別影像。二無分別影像。三事辺際性。四所作成辦」(大

正三〇、四二七a)

と説かれているが、ここには「唯識」という語が、梵・藏・漢のいずれにも見出されない。従って「声聞地」や「菩薩地」を中心に、『瑜伽論』の本地分(巻一—巻五十)では、「唯識」(vijñapti-matra)という語は説かれていないように思われる。

ところが『解深密經』では、「分別瑜伽品」に、

「謂即一切染淨法中所有真如。是名此中如所有性。此復七種。一者流轉真如。謂一切行無先後性。二者相真如。謂一切補特伽羅。無我性及法無我性。三者了別真如。謂一切行。唯是識性云々」(大正一六、六九九c)

とある場合の「了別真如」は vijñaptiāhata に相当する nam par rig paḥi de bshin rid となつてゐるし、「唯是識性」は vijñaptiva に相当する nam par rig pa rid となつてゐる。従つてここでは、漢訳の上では「唯是識性」とあるので、「唯識」(vijñapti-matra)が説かれてゐるようにも見えるが、實際は vijñapti-matra (唯識)という語は用いられてゐない。

このように「唯識思想」というから、当然、瑜伽唯識派の書物には、初めから「唯識」(vijñapti-matra)が説かれてゐるようにも見えるが、今いうように『瑜伽論』の「声聞地」や「菩薩地」には全く「唯識」(vijñapti-matra)という語は説かれてゐないから、これらの「声聞地」や「菩薩地」は、「唯識」(vijñapti-matra)が成立する以前の論書であると思われる。

それ故、『瑜伽論』の「声聞地」や「菩薩地」は比較的成立が早いと思われるので、それを含む本地分(巻一—巻

五十）が先に成立し（ここまでは梵本も見つかっているから）、卷五十一—卷百までが後から成立した部分が多いのではないかともいわれてきたが、ところが勝呂博士は「初期唯識思想の研究」の中で、

「学者の中には、『瑜伽論』は歴史的に形成されたものであつて、その中のある部分——たとえば菩薩地あるいは本地分——がさきに成立し、他の部分がそれに付加増広されたものであらうと、漠然と予想しているものがあるようであるが、この予想は実際に『瑜伽論』を読めばただちに裏切られる。『瑜伽論』は諸所において、たとえば「声聞地に説くごとし」とか「撰決摂分に説くごとし」といつて各部分が相互に引用し合つていて、現形が一時期において成立したものであることを示しているからである。この引用を示す文句はサンスクリット本、玄奘訳、チベット訳において一致して見出されるから、後から付加ではないと見られよう<sup>27)</sup>と論じておられる。

確かに「菩薩地の『力種姓品』（玄奘訳、卷三十八）に『撰事分に説く如く』知るべきである」とあり、「菩薩地の『戒品』（玄奘訳、卷四十二）に『撰事分の如く』知るべきである」とあることは、『菩薩地』が成立する時点で『撰事分』が成立していたことになる。

また「菩薩地の『戒品』（玄奘訳、卷四十二）に『声聞地の如く』知るべきである」とか、「菩薩地の『供養親近無量品』（玄奘訳、卷四十四）に『声聞地の如く』了知すべし」とか「菩薩地の『菩提分品』（玄奘訳、卷四十五）に『声聞地の如く』了知すべし」とあることは「菩薩地」が成立する時点で「声聞地」が成立していたことになる。

更に「菩薩地」に相当する『菩薩地持経』にも、『力種姓品』に「如撰事如説」（大正三〇、九〇四b）とあり、『戒品』に「如四摂品説く」（大正三〇、九一七b）とあることは、『菩薩地持経』が訳出される以前の原本（サンスクリット本）に、すでに「撰事分」が成立しており、それよりの引用と考えられる。

また同様に「菩薩地」に相当する『菩薩地持経』に「謂声聞地」（大正三〇、九一七c）とか「如声聞地」（大正三〇、

九二七a)とか「声聞地所説」(大正三〇、九二七c)とあることは、やはり『菩薩地持經』が訳出された時点では「声聞地」に相当する部分がすでに成立していたことになる。

このように考えてくると、『瑜伽論』の「菩薩地」が成立した時点では、「声聞地」や「撰事分」はすでに成立していたのではないかと思われる。

この他にも『瑜伽論』の成立過程を解明するための資料もあるが、別の機会にゆずることにする。

## まとめ

「唯識思想の成立と展開」というテーマのもとに、唯識を学ばんとする初心者のために、少しでも役に立てばと思い、「唯識思想」は仏教の思想の流れの中で、如何なる思想的位にあるかを、義浄三蔵の『南海寄帰内法伝』を引用しながら論じてみた。

次に初期唯識論書の中で、「弥勒の五部論」といわれるものの中にも、後世の成立ではないかと疑われている『法性分別論』について、*viññapti-mātṛa* (唯識)という語が説かれているから、弥勒の論書とするには疑わしいと論じた。また別の理由で、『法性分別論』をもっと後期の論書であると複数の人々が論じている。

『瑜伽師地論』がどのようにして成立したか、まだはつきりしない点もあるが、唯識思想の所依の經典である『解深密經』も『瑜伽論』の卷七十五―卷七十八と全く一致するし、「菩薩地持經」も『瑜伽論』の「菩薩地」と相対応する点も注目すべきである。これは「大乘經典」の成立を考察する上で、何らかの示唆を与えているのかもしれない。

このように「唯識思想の成立」を考えると、『瑜伽師地論』全体と「菩薩地」の梵本や『菩薩地持經』との関連は重要であると思う。



唯識思想を学ぶ人のために、少しでも参考になればと思い、最近の学説などを紹介したが、初心者にとってはややむつかしい点もあったかもしれない。初期唯識論書の成立に関しては、まだくはつきりしていない点もあるが、これらを解明して、唯識の体系の成立過程を少しでも明らかにしたいと考えている。

(平成十二年五月二十八日脱稿)

## 註

- ① 「唯識三年俱舍八年」については、最近私が書いた論文を参照して頂きたい。  
拙稿『唯識三年、俱舍八年』考（『印度学仏教学研究』第46卷第二号）七六頁参照。
- ② 羅什訳「不生亦不滅 不常亦不斷  
不一亦不異 不來亦不出」（大正三〇、一b）  
「若人未<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>真空智慧<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>我心<sub>一</sub>故聞<sub>二</sub>說<sub>レ</sub>無我<sub>一</sub>即生<sub>二</sub>恐懼<sub>一</sub>。」（大正三二、三二七c）  
「遍計所執された」とはいうまでもなく「遍計所執性」「依他起性」「円成実性」のいわゆる唯識三性説の中の遍計所執のことである。
- ③ 安井広済博士「中觀思想の研究」（昭和36年12月）二八四頁参照。
- ④ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」一六九頁参照。
- ⑤ 大正一六、六九七a参照。
- ⑥ 梶谷憲昭氏「チベットにおける唯識思想問題」（『東洋學術研究』第21卷第2号）昭57年参照。  
拙稿「唯識思想の成立について―唯心から唯識へ―」（『仏教学セミナー』第49号）昭和64年参照。
- ⑦ 拙稿「『大乘莊嚴經論』の諸問題並びに第11章求法品のテキスト校訂」（『大谷大学研究年報』第52集）平成12年3月参照。
- ⑧ 松田和信氏「Nirvikalpaprapaśa 再考―特に『法法性分別論』との関係について」（『印度学仏教学研究』第45卷第1号）平成八年 二六五頁参照。
- ⑨ 宇井博士「印度哲学研究」第一卷三七七頁参照。

- ⑪ 拙稿「唯識思想の成立について——唯心から唯識へ——」（仏教学セミナー第49号）昭和64年一四頁参照。
- ⑫ 袴谷憲昭氏「唯識文献における無分別智」「駒沢大学仏教学部研究紀要」（第43号昭和60年）二二四頁参照。
- ⑬ 勝呂信静博士「初期唯識思想の研究」一八六頁参照。
- ⑭ 松田和信氏「Nirvāṇaparyeṣa 再考——特に『法法性分別論』との関係について——」（印度学仏教学研究第45巻第1号）三六五頁参照。
- ⑮ 例えば所知相分の「阿毘達磨大乘經中。薄伽梵法有三種。一雜染分。二清淨分。三彼二分」（大正三一、一四〇c）とある場合とか總標綱要分第一の「阿毘達磨大乘經中。薄伽梵前已能善人大乘菩薩。為顯大乘体大故說。謂依大乘諸仏世尊有十相殊勝殊勝語」（大正三一、一三三c）とある場合が該当すると思う。
- ⑯ Wogihara: Bodhisattva-bhumi 1930 参照。
- ⑰ 宇井博士「梵漢对照菩薩地索引」（昭和36年）参照。
- ⑱ 松田和信氏が梵文断片を發見、公表した。『解深密經』における菩薩十地の梵文資料——『瑜伽論』『撰決択分』のカトマンドウ断片より——」（仏教大學総合研究所紀要」（第2号）一九九五年）
- ⑲ 桑山・袴谷共著「玄奘」四九頁参照。
- ⑳ 同書 四九頁参照。
- ㉑ 同書 五一頁参照。
- ㉒ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六頁参照。
- ㉓ 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」（講座、大乘仏教8）一二頁参照。
- ㉔ 拙稿「唯識思想の成立について——唯心から唯識へ——」（仏教学セミナー第40号）四頁参照。
- ㉕ 高崎博士「瑜伽行派の形成」一三頁参照。
- ㉖ E. Lamotte: Saṃdhi-nirmocana-sūtra p. 99 註10
- ㉗ E. Lamotte: Saṃdhi-nirmocana-sūtra p. 99 註11
- ㉘ 勝呂博士「初期唯識思想の研究」二四九頁参照。
- ㉙ 同書 二五〇頁参照。